

広報 おばま

《表紙》

5月16日、国富小4年生が田植えを体験しました。児童らは、JAわかさ小浜青壮年部の皆さんに教えてもらいながら、14㍍の田んぼにコシヒカリの苗を植えていきました。収穫した米は、救援米としてアフリカのマリ共和国へ贈られます。



【特集】

「山川登美子記念館」開館

2007

6

「山川登美子記念館」開館

髪ながき

少女とうまれしろ百合に

額は伏せつつ君をこそ思へ



明治を代表する歌人、山川登美子は一八七九(明治十二)年七月十九日、遠敷郡雲浜村上竹原(現在の千種一丁目)で旧小浜藩士山川貞蔵、ゑいの四女として生まれました。山川家は小浜藩歴代の重臣の家柄であり、厳格な家庭に育った登美子は、雲城高等小学校卒業前後から生花、箏、習字、旧派の和歌などに親しみました。

*

一八九五(同二十八)年、大阪の梅花女学校本科邦語科に入学。二年後に卒業し帰郷するも、一九〇〇(同三十三)年、再び梅花女学校の研究生となりました。

この頃から活発に作歌活動を行うようになり、英語を学ぶかたわら、創立されたばかりの東京新詩社(与謝野鉄幹主宰)の社友となりました。その機関誌「明星」に投稿し、「白百合」の雅名で鳳晶子(後の与謝野晶子)らと歌才を競いました。

この年の八月、登美子は初めて与謝野鉄幹に会い、ひそかな恋心を抱

きながら鉄幹の指導のもとで新派の作歌活動を続けました。鉄幹に恋心を抱いていた登美子でしたが、翌一九〇一(同三十四)年、父の決めた山川家本家の山川駐七郎と結婚しました。登美子は、その時の心境を次のように歌っています。

それとなく

紅き花みな友にゆづり

そむきて泣きて忘れて草つむ

*

しかし、結婚生活も長くは続かず、一九〇二(同三十五)年十二月、夫駐七郎は病気のため死去。翌年生家に復籍しました。

一九〇五(同三十八)年、与謝野晶子、増田雅子(後の茅野雅子)と三人で歌集「恋衣」を刊行し名声をあげましたが、夫から伝染した肺結核を患い、京都の姉の家で療養生活を送りました。

一九〇八(同四十一)年、小浜に帰郷し療養するも病状が悪化し、一九〇九(同四十二)年四月十五日、二十九歳九カ月の生涯を終えました。

記念館の正門



【名称】 山川登美子記念館
【住所】 小浜市千種一丁目 10-7
【電話】 0770 (52) 3221
【開館】 9時～17時(入館は16時30分まで)
【観覧料】 大人…300円(20人以上250円)、
高校生・大学生…200円(20人以上150円)
【休館日】 毎週火曜日、12月29日～1月3日



開館記念式典(4月21日)

四月二十一日、自筆の歌稿や愛用品などを展示した「山川登美子記念館」がオープンしました。
明治時代の女流歌人で、与謝野晶子らと文芸誌「明星」などで活躍した山川登美子。平成十七年に生家、同十八年に多数の遺品を遺族から寄付していただいたことを受け、市では、生家を記念館として一般公開するために整備を進めてきました。
今後、歴史と文化の拠点施設として活用していきます。

■問い合わせ 世界遺産推進室 内線442

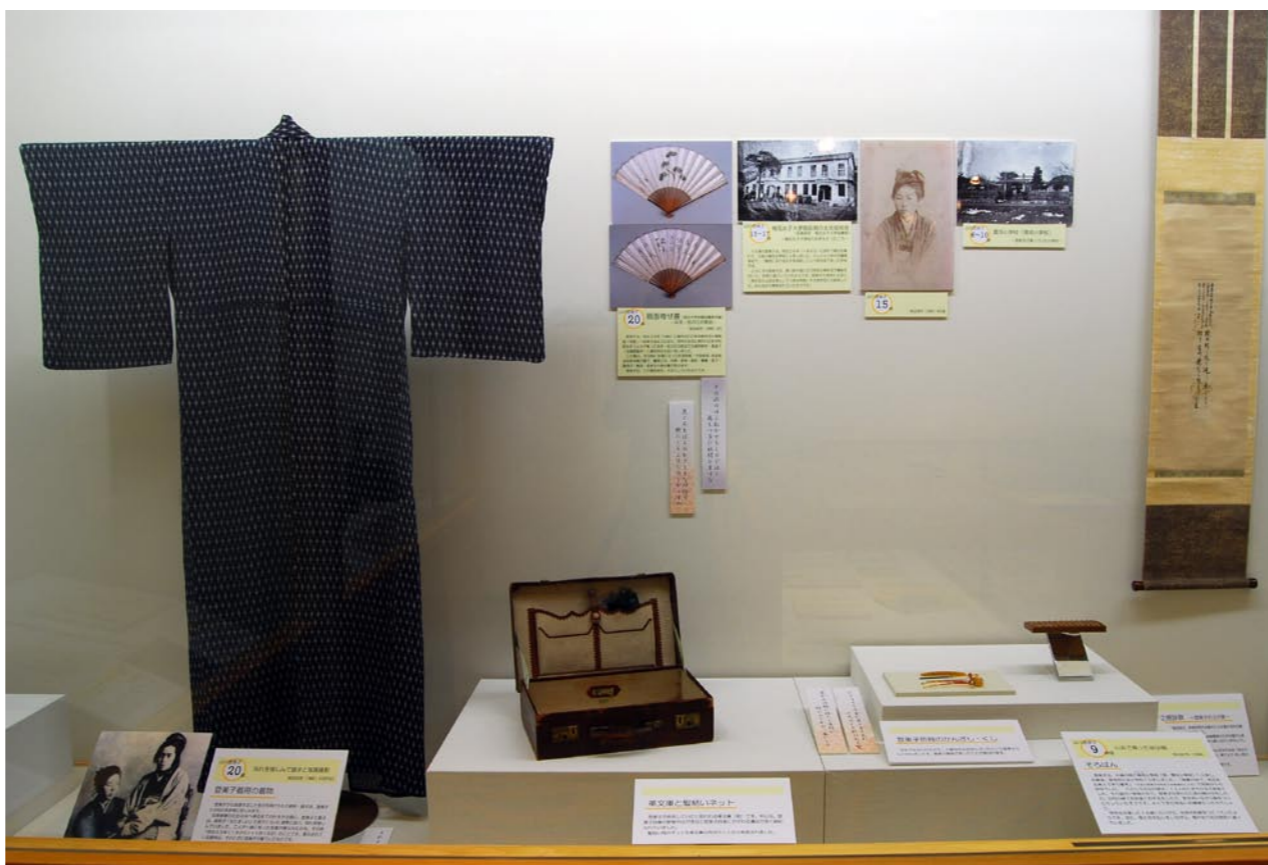
記念館周辺図



直筆の作品や手紙などを公開

山川登美子記念館は、一部二階建て延べ285平方メートルの木造家屋で、その一階部分を公開しています。入館すると、正面に台所を改修した展示室があり、登美子が使っていたそろばん、かんざし、着物、箏などの遺品のほか、登美子の歌が掲載された雑誌「明星」など貴重な資料が並びます。

中でも目を引くのが、与謝野鉄幹が赤字で添削した歌稿や亡くなる二日前に作った辞世の歌など直筆の作品や手紙です。このほか、結核を患って晩年を過ごした「終焉の間」や座敷などを公開。二十九歳で亡くなるまでの登美子の足跡が展示されています。



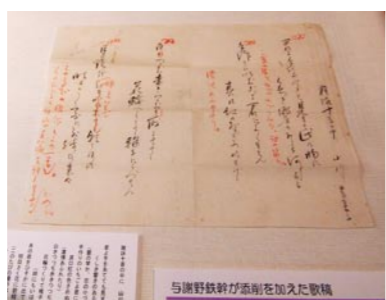
登美子が使ったかんざし、くし、着物など



最期を迎えた部屋「登美子終焉の間」



登美子の歌が掲載された雑誌「明星」



与謝野鉄幹が添削した歌稿



登美子倶楽部「しろゆりの会」
事務局 山脇のぶこ 延子 さん
(小浜広峰)

山川登美子記念館、わたしも早速見学させてもらいました。きちんと整備された展示室には、生前、登美子が使っていた品や着物など多数展示しており、明治の歌人を身近に感じることが出来ます。

特に、与謝野鉄幹が朱筆で添削した歌は、とてもリアルでいいですね。コピーしたものではありません。本物というところに価値があると思います。

また、登美子が茅野雅子にあてた手紙が展示されているのですが、あの達筆な登美子の文字が乱れているんですよ。病に苦

しむ登美子の姿が目には浮かんできましたね。そして、最も胸を打たれたのが、息を引き取った「登美子終焉の間」です。この部屋を眺めていたら、何ともいえない気持ちになりました。

多くの遺品が並ぶ登美子記念館は本当にすばらしい施設です。県内外の人はもちろん、市民の皆さんにも足を運んでいただきたいですね。

登美子倶楽部「しろゆりの会」：書道家や画家、文化に関心の深い人たちが集まり、登美子の文学的な功績を顕彰し、歌の勉強をしていく会。会員数は県外を含めて約百五十人

登美子倶楽部「しろゆりの会」

会長 安田純生さん(天阪府箕面市)



作品を読んで親しんでくるとその作者と接したい、作者のことをもっと知りたい：そんな気持ちになります。しかし、故人と接することはできません。そうするとゆかり

のある場所、遺品などに興味があわてきます。山川登美子については、この記念館で遺品を展示していただくことになりました。これは「しろゆりの会」だけでなく、これから登美子の優れた文学に親しもうとしている一般の人にとっても非常にありがたいことです。感謝しています。

福井市から訪れた女性四人組



テレビで記念館のオープンを知り、友達四人で来ました。心の落ち着く

懐かしいたずまいの建物、数々の遺品。登美子の性格や才能について、あらためて知ることができました。あの時代に恵まれた才能を持ち、開花させた登美子は幸せだったと思います。

ただ、場所がわかりづらく、ここへ来るのに迷ってしまいました。